

2014年11月25日発行

地域と協同の 123号

研究センターNEWS

巻頭エッセイ

2014協同集会 in 東海

「地域で発見 協同って何？」

～人に出会い、つながり、協同する～
を終わって思うこと



永戸 亮

日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会センター事業団
東海事業本部 事務局長（当時）

3月から実行委員会を毎月重ね、9月13日に名古屋市立大学で、230名ほどの参加の中、無事集会を終えることができました。集会が迫り、分科会の形が見え始めてから、ようやく実行委員会にも熱が入り始めました。受身ではいけないという、協同への渴望が、集会を通して顕在化していったように感じています。

記念講演をさせていただいたNHKの板垣氏の話で、頼ることのできる存在や、それぞれに役割が必要だということ再認識させられました。老人漂流社会という重たい現実に対して、団地の中で子どもや高齢者のつながりが生まれる事例のコミカルさに、緊張と緩和の効果も手伝ってか、希望を見出すことができました。協同集会を意味づける貴重な講演をいただき、板垣氏には感謝の気持ちで一杯です。

また、分科会もそれぞれに熱い議論が交わされたようで、参加者のアンケートの中で印象に残ったのは、中高生や大学生の発言に感銘を受けた方が多かったということです。板垣氏の講演の中の、高齢者を支える子どもたちの話と同様に、子どもや若者たちを通して大人も成長し、地域が育っていく、その萌芽を感じました。力が弱くても、様々な困難を抱えた当事者でも、つながりと役割によって、誰かの力や地域の力になることができます。誰かに依存するのではなく、自らが力を発揮し協同していく、そのような各地の取り組みに勇気づけられた人も多かったのではないのでしょうか。

10名の共同代表、実行委員、参加者、それぞれがこの出会いを通して、今後の地域、そしてつながりを思い描くことのできた集会になっていれば幸いです。そして集会を経て、実践の中で無数の協同が地域の中に生まれることを信じています。

板垣氏が帰り際に「土曜日の昼間に、これだけ関心をもった人たちが集まるということに救いを感じる。」と話されていました。このことに未来への希望が込められていると思います。多くの出会いに感謝します。ありがとうございました。

CONTENTS

巻頭エッセイ 2014協同集 IN東海 を終わって思うこと	1
食と農パネル 農業生産法人株式会社「中甲」 地域農業を担う大規模農業の実例に学ぶ	2
協同集会in東海—第5科会「自然がつなぐ人と人 都市と農村」 人と自然を含む資源の広域的なガバナンスに基づく 協働と循環経済の可能性	3
とうかい食農健サポートクラブ 大人の社会見学 「とうふ工房いしかわ」と「麩屋銀」見学会の紹介	4
情報クリップ	5-7
企画案内・書籍案内	8

研究センター 11月の活動

4日(火) 事務局会議
7日(金) 環境パネル 新名古屋火力発電所見学
8日(土) 第3回研究奨励助成 報告会(岐阜会場)
10日(月) マイスターコース第5回/NEWS編集委員会
12日(水) 暮らしを語りあう会
13日(木) 食と農パネル世話人会
14日(金) 常任理事会
18日(火) フォーラム職員の仕事を考える世話人会
20日(木) 三河地域懇談会 拡大実行委員会・認知症学習会
21日(金) 第8回協同の未来塾
26日(水) NEWS 123号発送

「食と農パネル」 農業生産法人 株式会社「中甲」 調査見学会

地域農業を担う 大規模農業 の実例に学ぶ

良く晴れた10月1日に、愛知県豊田市の農業生産法人 株式会社「中甲（なかこう）」に、世話人10人で、稲刈り作業を見ながら大規模な農業について学び、私たちの食を支える農業について考えることを目的に伺い、杉浦社長よりお話をお聞きしました。その一部を紹介します。（文責：事務局）

≪農業生産法人株式会社「中甲」概略≫



9台あるコンバイントラクターで稲刈り

設立されたのは昭和49年です。地域の若手が、農家として生きていこうと農事組合法人「中甲」をスタートさせました。当初は農家の集まりで、機械を共同購入して、その機械を利用して預かった田圃でやっていました。設立時、水稻33ha、麦大豆45haから年々増えて、平成26年は、水稻218ha、麦大豆279haを工作してみえます。その他に野菜もつくり、面積は500haを超えます。昭和63年に名古屋勤労市民生活協同組合との交流がスタートし、ここで栽培するお米が組合員に届けられています。環境保全として、減農薬、低農薬の栽培の取り組みを重ね、平成8年には、第一回環境保全型農業推進コンクールで農林水産大臣賞を受賞しました。有機栽培の他、減化学肥料、減農

薬栽培を実践しています。平成11年からは無農薬で、農薬を一切使わない水稻栽培にも取り組み、コープあいちに届けられています。

≪地域の概要・作業と栽培体系≫

豊田市南西部は、愛知県で1番、2番の収穫量がある米の産地です。ただ、この地域は低丘陵地になり、起伏に富んでいて、畦畔（けいはん）率（耕地面積にしめる畔（あぜ）の割合）が高く、区画面積が小さく、作業効率はあまりよくありません。作業時間3分の1は草刈りをやっています。土質は粘土質で、野菜にあまり向かず、稲作中心です。田圃一枚の平均面積は、2反を切り1反8畝くらいです。枚数で言うと何千枚ですが、半径4～5キロの間にあります。水稻の218haは全面受託で稲作を行っています。作業は「代掻き」「育苗」「田植え」「草刈り」「草取り」「収穫」「籾の持ち込み」などです。2年かけて、米と麦と大豆を栽培しています。農閑期はなく、暇なしです。栽培品目は、水稻は「コシヒカリ」「大地の風」で両方ともコープあいちに届けています。小麦は「イワイノダイチ」と「キヌアカリ」という品種です。あとはレンコン、キャベツ、トウモロコシ、タマネギなど野菜を作っています。

≪耕作面積・収穫量≫

面積がなぜ広がってきたかという、トヨタ自動車の工場ができ、農家が勤めに出るため農業に手が回らなくなり、その人達の農地を預かるようになったからです。近年は高齢化の中、農業をリタイアされる方も増え、毎年10haが増えています。出し手の農家数は1000軒を越えています。受託する農家とのつながりも希薄になり、自分の田圃がどこかわからないということもあります。以前は農家がいって問題にならなかったことが、苦情になるようになりました。例えば、道路に泥が落ちていたとか、藁のにおいが臭いとかです。近郊型の農業にとって大きな問題です。地区の水田面積の7割くらいを中甲でやっています。米の収穫は1万5千俵を越えます。お米は、農協へ出荷しています。今年は去年より3000円くらい安くなっていて、この先、経営がやっつけられるか不安です。売り先の一番大きいのはコープあいちです。消費者の皆様には、再生産できる適正な価格で買って欲しいですね。消費者が理解して買っていただけるようになればと思います。

≪若い職員が支えて≫

正規雇用の従業員が男性19人、女性1人います。平均年齢は33.9歳です。事業部制をとっていて、移動距離を少なくするため3つの地域に米麦大豆をつくるチームがあります。その他に園芸、野菜をつくるチーム、有機米と有機大豆だけをつくるチームがあります。職員はその他事務パート、現場で働いてくれるパート、水稻の水廻りをみる（稲作の経験者や定年退職した地域の）人、ベトナム実習生6名等いて、総勢50名くらいです。

＝稲刈り作業中に、職員の方にお聞きしました＝

「稲作の場合、土地が広いので機械化できますが管理がたいへんです。一反は100m×100mで、この田圃は4反ちょっとくらいです。稲刈りは1日2町歩くらいやります。コンバインは1千万円位します。」「家族は妻と子どもが3人います。結婚してから、転職しました。実家は農家で、嫁の実家も兼業で農家でした。子どもの時から農作業は手伝っていて、体験していて、仕事の感覚でなく、楽しいですね。」



「草刈り、大好き」

9月13日 協同集会in東海 —第5分科会「自然がつなぐ人と人 都市と農村」 人と自然を含む資源の広域的なガバナンスに基づく 協働と循環経済の可能性

去る9月13日に名古屋市立大学滝子キャンパスで開催された「2014協同集会in東海」の午後6つの分科会は、東海の生協、ワーカーズコープ、協同組織などの参加者で活発な話し合いが行われました。今号は5分科会コーディネーターをされた熊崎さんより寄稿いただきました。ご紹介します。

◀ 寄稿：熊崎辰広氏

（コープ岐阜元職員・岐阜地域懇談会世話人）より

初めから決まっていたわけではなく、準備会に何度か参加するなかで、偶然に決まったコーディネーターの役割でした。あまり慣れない中で、少しずつ方向性を固めてきました。その際土台にしたのは、「研究センター」での奨励研究の内容でした。そこで注目していたのは中山間地域で働く「集落支援員」や「地域おこし協力隊」で、この働き方をあらためて「協同労働」として見直すことができないか、というのが基調のテーマになりました。それはまた「労働」そのものを見直す契機にもなるように思えました。



分科会の内容は、はじめに農村と都市のつながりを主題にしたDVD「海と森と里と つながりの中で生きる」を見ました。かつてあった川による資源の豊かな生産と循環の仕組みが、高度経済成長による農村地域の犠牲と工業中心の経済活動により寸断され、疲弊してきた歴史を、農林漁業の当事者による言葉で表現されています。そのことを確認しつつ、次に3人のパネラーによる報告を受けました。

最初は、NPOマルベリークラブ中部の佐藤さんの報告です。里山の休耕田に桑の木を植え、蚕を飼育しながら、その副産物（桑の葉、蚕、繭糸等）を日常生活に活かし、地域のコミュニティーを作り出そうという活動でした。かつて日本のどこにもあった養蚕業は、高度経済成長以前の日本の産業を支えていました。それが衰退し、里山も荒れ獣害の被害にもつながるということで、あらためて養蚕の技術も継承しながら、食育や地域のつながりや仕事づくりに生かされることが望まれます。

次は、ワーカーズクラブ小牧の西川さん。『森林再生に向けて地域のお寺と協同』というテーマで、里山にある史跡の大山廃寺跡地の再生整備を進めながら、自然に学び、地域にある資源の活用として養蜂、竹炭、椎茸栽培の仕事起こし、ワーカーズコープとしての就労支援が目指されています。

次は岐阜県山県市集落支援員の山口さん。集落支援員として限られた3年間の活動のなかで、地域おこし協力隊とともにさまざまな地域活動、人との出会い、都市から人が来てもらうための体験事業を通じて地域の魅力を伝えながら、農家レストランや古民家再生や空家利用、棚田再生などに取り組み、地域での持続できる仕事作りと、地域で生活していく気概を語ってくれました。その次は、残念ながら当日は欠席となった、岐阜県郡上市の地域おこし隊の加藤さんの活動で、集落点検活動や稲田オーナー制度、和良鮎ブランド作りなどを、パワーポイントにより紹介しました。

これらの報告を受けて、コメンテーターの岐阜大学の荒井教授のまとめでは、「日本の特殊な事情があり、工業中心の経済、都市中心の発展で、農村地域との物質循環が絶たれてきているが、一般的な国では、都市と農村の物質循環がまもられており、木材や食料の高い自給率が維持されてきている。その意味で、今回の貴重な活動報告は、高齢化している農村地域での耕作放棄地などを対象に、地域の資源を活かし、さまざまな人とのつながりによる内発的な発展をめざすもので意義深いものである。」というような内容でした。

必ずしも「協同労働」としての内容を、パネラーの報告から深めることはできなかったのですが、基調とする課題は、継続して取り組まれていることが望まれているように思われます。

最後に参加者の声の一つを紹介します。

「都会と農村をつなごうという取り組みで、午前中の講演（『無縁社会・老人漂流社会を超えて』）で、情報は口頭しかないという言葉がそのまま生きていました。こんなつながり方が、地味だけど力になる。この分科会で発表された地域では、孤独死はありえないと思いました。」

★協同集会全体の報告書は、11月末頃に完成する予定とのことです。

（問い合わせは、日本労協連センター事業団東海事業本部（Tel052-222-3850））

とうかい食農健サポートクラブ おとなの社会見学

(文責：事務局)

「おとうふ工房いしかわ」と「麩屋銀」見学会の紹介

10月2日、高浜市で、安全安心の昔ながらの豆腐づくりをし、地域の食育活動を熱心にすすめ、生協とも取引のある「おとうふ工房いしかわ」と、昔ながらの技を今も大切に、高たんぱくの栄養食品「麩」の、お惣菜からお菓子まで食卓を彩る新しい味を提案している「麩屋銀」へ、会員の皆さん16名で行ってきました。

1. 「麩屋銀」工場見学と浅岡社長「麩」のお話

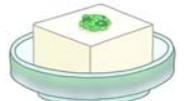
焼き麩の原料は、グルテン、小麦粉、重曹の3つだけです。西尾製粉さんの国産小麦100%のように、基本的に地元の小麦で麩を焼いたり、角麩を作ったりしています。小麦を固めて水で洗っていくと白くにごってくる部分がでんぷんになり塊ができてきます。固まって結合してゴムのような塊ができます。それがグルテンで、それを原料として使っています。

焼き麩を乾燥させてスライスしたものが、黒砂糖の麩菓子です。あれは完全にお菓子用で作って、非常に強いグルテンででんぷんをほとんど含んでいません。角麩は製造しているメーカーも販売先も愛知・岐阜しかありません（「そうなんだ」）。

グルテンと米粉で作る「すだれ麩」が金沢にあります。麩饅頭はグルテンともち粉で蒸して作ります。料亭で「京生麩」があります。あれはグルテンともち粉で作られます。それが京都から全国に伝わっていった過程で愛知では小麦粉に変わったと思います。お麩の原型は、グルテンを昔僧侶の方が食べていまして、中国から京都に伝わって、京都が発祥となっています。千利休がお茶会でグルテンを焼いて、「麩の焼き」と言いましてお茶菓子として出しています。それが焼き麩の原型ではないか、と言われていました。

**2. 「おとうふ工房いしかわ」石川社長の原点のお話**

豆腐屋さんの子は、たいへんだねとよく言われました。何よりも、かっこわるい、長靴はいて、前掛けして、油揚げ揚げて、匂いがついてしまいます。小さい時は、嫌で嫌でしょうがなかったんです。高校生のある時に、両親はまだ働いていて、野菜炒めと味噌汁を作って、親がおいしいと食べてくれ、うれしかった。大学進学してひとり暮らしをしふと、今、頃両親は飯食っているかと心配しました。自分は、豆腐屋に生まれたなら継ぐのが宿命かと思いました。それが会社の原点です。



大学を卒業し商社系の会社に入って、商品開発と事業開発をやり、日本一の豆腐屋になろうと思って帰って来ました。自分はアメリカ産の安い豆で、簡単につくれる凝固剤で安くつくって、食っていかなくては、勝ち残らないと、そんなことばかり考えていました。それを自分の子どもが食べている時、父親として、これでいいのかと思いました。それで、どうしようか、ちゃんとしたものをつくらう、自分の子供に食べさせたい豆腐をつくらうと思いました。にがりで作ると甘み、旨味がありました。一生懸命になると周りの人が支えてくれて、もっといいものをといわれました。にがりで作るためには、輸入大豆だとダメなんです、タンパクが少なく、国産大豆だと高品質ができる。国産原料に傾倒していきまして、国産大豆をつくる農家がみえ、いろんなことが見えるようになりました。

3. 「NPO法人だいきっず」沢田代表より食育のお話

「おとうふ工房いしかわ」15周年のときに、社内ボランティア「だいきっずクラブ」が「NPO法人だいきっず」になり、その代表を務めています。「だいきっず」という名称は自分で考えました。だいき、だいき、きっず、という言葉も隠されています。子供たちに大豆のすばらしさ、力強さを感じてもらいたいと願っています。種まき、枝豆収穫、看板づくり、2月に豆腐づくり、6～7月申込みから2月まで、一年で40～50家族が参加しています。ここ数年、企業も入り、社員教育で来ている人もいます。

西尾市吉良町にある復刻塩田の保存会と知り合うことができ、塩作りで出来るにがりに興味があり、塩作りを体験させていただきました。取れたてのにがりで作った豆腐と、市販のにがりで作ったものと比べると、ほとんどの子が自分で作ったものは美味しい、といえます。

このような活動をやりながら、食育の3C、おいしい、うれしい、楽しいを感じられる活動を「だいきっず」ではやっています。



寄せ豆腐で人気「まめぞう定食」

情報クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価(税別)
<p>▶広げよう 核兵器廃絶の願い</p> <hr/> <p>NAVI</p> <p>2014. 11 752</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>▶広げよう核兵器廃絶の願い</p> <p><僕らは商品探偵団> 食べなくなったらすぐできる ひとくちこうや豆腐 <全国のラブ・コープ・キャンペーン♪ラブコが行く> 大阪よどがわ市民生協 「コープDEスマイルフェスタ」開催！ <突撃☆あなたの街の組合員活動> コープこうべ&JF兵庫全漁連 <進化する生協の店づくり> 青森県民生協 コスモス館 <こんにちは！生協男子ですっ！> パルシステム群馬 東毛センター 清水寿春さん <宅配・現場レポート> コープCSネット 生協しまね 第11回仲間づくり研修会 <つながろうCO・OPアクション情報> 京都生協 釜石市社会福祉協議会 <生協人の基礎知識> 第8回 CO-OP共済 <この人に聴きたい> クロスカントリースキー&バイアスロン パラ日本監督 荒井秀樹さん</p>	<p>2014年 11月 A4版 35頁 定価 350～円</p>
<p>▶輝いて、働く 福祉がつくるまちと仕事</p> <hr/> <p>医療生協の情報誌 COMCOM</p> <p>2014. 11 567</p> <p>日本医療福祉生活協同組合 連合会</p>	<p>▶特集 働いて、輝く 福祉がつくるまちづくり</p> <p>インタビュー 福祉はまちづくりの拠点になる 社会福祉法人 優輝福祉会 理事長 熊原 保 [バンビのつぶやき 23] 100の生業を持つ百姓的な働き方 店主 中根桂子 [住まう 23] 暮らしのオトが聞こえる住まい (前編) グループホーム「なも」 南医療生協 [介護十人十色 22] 認知症の人と介護する家族を支えて35年 公益社団法人 認知症の人と家族の会愛知支部 [TOMOそだち 23] 「朝、熱が出ていたらどうしよう・・・」 働く女性を病児保育でサポート NPO法人ノーベル 代表 高亜希 [協同のある風景] 222 支え合いを通じて「協縁」がうまれる 反貧困ネット長野（長野医療生協）</p>	<p>2014年 11月 A4版 37頁 定価 400円</p>
<p>▶生協の産直に 未来はあるのか</p> <hr/> <p>くらしと協同</p> <p>2014. 秋号</p> <p>くらしと協同の研究所</p>	<p>巻頭言 容れ物としての「産直」～問題は何を盛り込むかだ 増田佳昭</p> <p>争論 生協産直に未来はあるのか？ 自分の頭で考える生協に期待 大木茂 「関係力」と「デザイン力」 松岡公明</p> <p>特集 生産者からみたパートナーとは 食を通じたまちづくりにむけて ～「鳥羽マルシェ」がめざすもの 岩橋涼 地場産農産物を用いた学校給食の成立条件 ～生産者グループ「にんじんの会」のとりくみから 山野薫 「人」に関心を持った産直交流へ 和歌山県紀の川農協の取り組み 加賀美太記 生産者の想いを伝える「産直新聞」 毛賀澤明宏</p> <p>くらしと協同をたずねて 沖縄県糸満市における伝統的な水産物行商販売の存続とその可能性 ～糸満公設市場と「あんまー市場」を事例に 田中佑佳</p> <p>海外の協同をたずねて 韓国における生協産直 金亨美</p> <p>書評 『協同組合未来への選択』 中川雄一郎・杉本貴志編／全労済協会監修 小田巻友子 『協同組合は「未来の創造者」になれるか』 中川雄一郎著／JC総研編 北島健一 『協同組合研究の成果と課題1980-2012』堀越芳昭／JC総研編 二場邦彦</p>	<p>2014年 秋号 B5版 39頁 定価 350～円</p>

▶日本農業の変わり目と問われる適応能力

生活協同組合研究
2014. 11
466
(財) 生協総合研究所

- 巻頭言 新教育長とガバナンス —基礎教育制度の根幹を考える 麻生幸
- ▶特集 日本農業の変わり目と問われる適応能力
 - 総論 日本の食糧と農業：現在地を確認する 進化する「生きた協定」TPP 生源寺眞一
 - 理念なき日本の交渉姿勢— 石井勇人
 - 日本農業の変質と農協改革の行き末 神門義久
 - 農地中間管理機構の創設と生産現場に求められるもの 小針美和
 - 日本の食料安全保障 川島博之
 - コラム1 覚悟を決めてシンプルに
 - JA浜中町とJA越前たけふ— 白水忠隆
 - コラム2 TPPに関する日本協同組合学会の意見表明について 関英昭
- 研究調査
 - 生協産直とは何か
 - 生協産直事業と食料・農業問題に関する調査より— 宮崎達郎
- 海外情報
 - フィンランドの高齢者福祉の近況とその前提② 鈴木岳
- 時々再録
 - 日本記者クラブ「農業問題を考えるシリーズ」 白水忠隆
- 本誌特集を読んで（2014・9） 鈴木穰・矢野朝水
- 新刊紹介
 - 土庫澄子『逐条講義 製造物責任法』 板谷伸彦
 - 樋口恵子編著『自分で決める 人生の終い方』 山梨杏菜

2014年
11月
72頁
B5版

▶食糧自給から考える日本の食と農

月刊JA
2014. 11
717
全国農業協同組合中央会

- 特集 食糧自給から考える日本の食と農
 - 【解説1】食料・農業・農村基本計画の見直しと食料自給率 中嶋康博
 - 【解説2】食料自給率をめぐる議論について 農林水産省大臣官房食料安全保障課
 - 【提言1】生産面から考える食料自給 品川侑
 - 【提言2】消費面から考える食糧自給 三谷和央
 - ・きずな春秋 —協同のこころ— 童門冬二
 - ・中央会制度60年を考える / JAグループ共通コンテンツ
 - ・地方紙ニュース 第44回
 - 国家戦略特区 養父市指定をどう生かす 西井由比子（神戸新聞社）
 - 直言！JAへのメッセージ 食と農でつなぐ 岩崎由美子（福島大学教授）
 - JAトップインタビュー「くらしの活動」と「正組合員班」を軸に
 - 愛知県JAあいち中央 代表理事組合長 石川克則
 - ・地域・支店から『戦略』を考える
 - 協同を支える学びの場づくり 西井賢悟
 - ・展望 JAの進むべき道
 - 協同組合の精神と足跡を伝える取組みを 加賀尚彦
 - ・海外だより [DC通信] 42
 - 11月めじろ押しの外交日程 古林秀峰
 - ・見せましょう、協働の底力！
 - 地域の宝物のすてきな巡り合い（中編）
 - あまおうプレミアムスパークリングワイン（福岡県） 青山浩子
- 次代へつなぐ協同実践塾
 - ・持続可能な農業の実現
 - JAグループにおける再生可能エネルギー利用促進の取り組みについて JA全中営農・経済改革推進部
 - ・豊かで暮らしやすい地域社会の実現
 - 高齢組合員の買い物をお手伝い JA全中くらしの活動推進部
 - ・10年後JAが存続するために
 - 資産査定管理態勢の改善・強化に向けて（後編） JA全中経営指導部

2014年
11月
A4版
64頁
年間購読料
4,800
円(送料込)

<p>▶農協改革問題と協同組合の社会的役割</p> <hr/> <p>協同の発見</p> <p>2014.10 263</p> <p>協同総合研究所</p>	<p>■巻頭言 協同組合運動の大連合を 富沢賢治 (協同総合研究所・副理事長)</p> <p>■ 特集 農協改革問題と協同組合の社会的役割 ～地域と共にある協同組合～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・政府与党による農協改革案が意味するもの 石田正昭 (三重大学招へい教授) ・21世紀型の変革構想を ーグリーン・リカバリー、BI、地域通貨、ワーカーズコープの意義 伊藤誠 (東京大学名誉教授) <p>■連載</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域づくりに自然エネルギーをどう活かすか? ①～小田和の実践から～ 小田和大和 (社団法人エネルギーから経済を考える経営者会議ネットワーク会議事務局) <p>■報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新潟における「社会的企業の起業研究」に係る調査・研究の取り組み 小椋真一(にいがた協同ネット事務局) ・自立支援事業の課題とアプローチー子ども・若者・生活困窮者の『生きること』『働くこと』を考える「おかやま自立フォーラム」から 田代明(労協センター事業団中四国事業本部 事務局長) <p>■会員だより</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いま『協同』が創る2014全国集会in九州・沖縄」の成功に向けて 大場寛(労働センター事業団九州・沖縄事業本部 本部長代行) ・いま、『協同』が創る2014全国集会in九州・沖縄事務局として 飯沼潤子 (協同集会事務局) 	<p>2014年 10月 B5版 72頁 定価1300円</p>
---	--	--

<p>▶農協「改革」論議の諸論点</p> <hr/> <p>文化連情報</p> <p>2014. 11 440</p> <p>日本文化厚生農業協同組合連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー (11) 細かいニーズに手間を惜しまず応える 黒崎宣芳 文化連会員単協の経営分析からみえる農的地域協同組合への課題 村上一彦 二木学長の医療時評 (126) 2000年以降の日本の医療・社会保障改革 二木立 ー政権交代で医療政策は大きく変わるか? 田代洋一</p> <p>農協「改革」論議の諸論点 ー非営利性・公共性をめぐって 田代洋一</p> <p>「国際家族農業年」が問いかけるもの(3)</p> <p>日本の発展途上国支援と家族農業 関根佳恵 ーフィリピンの無農薬バナナ産地から考える 天笠啓祐 食の危機を市民の力で乗り越える 岡本達哉</p> <p>放射線科ライフサイクルコスト戦略の推進について 大島堅二 岐路に立つ日本のエネルギー政策 (3) 黒柳敏弥 原発事故費用はいくらか 藤平ちえ子 厚生連治験ネットワークに参加して 中小病院の挑戦 松岡洋子 野の風●「俺の分まで幸せに」と散った特攻隊員 鶴殿博喜 デンマーク&世界の地域居住 (66) 国境なき医師団 イギリスの高齢者施設: ナーシングホーム ロバート・ハワード グーテンターク、ドイツ (2) 小磯明 ベルリン、ベルリン、ベルリン! (1)</p> <p>ワクチンはなぜ子どもたちに届かないのか</p> <p>日本とイギリスの認知症ケア</p> <p>ヴィラ・ラヌッチ 地区高齢者介護施設</p>	<p>2014年 11月 B5版 80頁 文化連情報 編集部 03-3370- 2529 *注</p>
---	--	---

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。 詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内



「え！がんだけじゃなかったの？老化と放射能って関係あるの？」

●2014年12月7日(日)13:30~15:30(13:00開場)

参加費無料

●東別院会館2F 会議室「蓮」(なごや地下鉄名城線東別院駅下車4番出口徒歩3分)

《プログラム》 13:15 開会挨拶

13:20 Cラボの活動報告○3年間の測定結果・試料種別・依頼種別などのまとめ

○測定ボランティア養成講座・交流会・学習会などのまとめ

○調査報告 市場調査・Sr-90監視調査・岩手県土壌汚染調査・

みんなのデータサイト測定キャンペーンなど

14:00 崎山比早子さんの講演と質疑 16:00 閉会挨拶

* 閉会后、崎山さんをお迎えして懇親会(食事会)を予定しています。ご都合のつく方はお気軽にご参加ください。(懇親会は参加費が別途必要です。)・・・主催団体HPより

【主催】 未来につなげる・東海ネット 市民放射能監視センター(略称:Cラボ) TEL 052-501-0251
(平日9:00-18:00/(株)名古屋生活クラブ気付) Cラボ メールアドレス tnet_sokutei@ray.ocn.ne.jp
⇒ <http://tokainet.wordpress.com/>

書籍案内



人口・食料・資源・環境 家族農業が世界の未来を拓く

食料保障のための小規模農業への投資

著者：国連世界食料保障委員会専門家ハイレベル・パネル 著
家族農業研究会(代表 村田武)・(株)農林中金総合研究所 共訳
関根佳恵(かえ)(立教大助教・現愛知学院講師) 岩佐和幸(高知大学教授) 橘高(きったか)研二(農林中金総合研究所) 村田武(愛媛大学客員教授) 高梨子文恵(広島大学特任講師) 岩橋涼(追手門学院中学校・高等学校非常勤講師)

定価：2,160円 (税込) 出版：農山漁村文化協会(農文協)
発効日：2014/02 判型/頁数A5 192ページ

解説：家族農業が食料(安全)保障や食料主権、真の経済成長と雇用創出、貧困削減、生物多様性の持続的管理、文化的遺産の保護等々に貢献できることを、FAO(国際連合食糧農業機関 Food and Agriculture Organization of the United Nations) という国際機関が世界各国各地域の実情を調べ、実証、勧告。

農山漁村文化協会ホームページより

2014年11月25日発行(毎月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

研究センター 12月の活動予定

- 1日(月) NEWS編集委員会
共同購入事業マイスターコース第4回
- 3日(水) 三河地域懇談会
フィールドワーク「のき山学校」見学交流会
- 6日(土) 第3回研究奨励助成報告会Ⅱ
- 10日(水) 環境パネル世話人会
- 11日(木) フォーラム職員の仕事を考える世話人会
- 13日(土) 尾張地域懇談会世話人会
ものづくりの思いを語る会
- 20日(土) 第4回理事会/東海交流フォーラム実行委員会
- 22日(月) 三河地域懇談会実行委員会